

## エルニーニョ監視速報 ( No. 216 )

2010 年 8 月の実況と 2010 年 9 月～2011 年 3 月の見通し

- ラニーニャ現象が発生しているとみられ、冬までは持続する可能性が高い。

### 【解説】

#### 太平洋

8 月のエルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は  $-1.0^{\circ}\text{C}$  だった。6 月の 5 か月移動平均値は  $-0.4^{\circ}\text{C}$  だった。8 月の南方振動指数は  $+1.9$  だった ( 図 1、表 )。8 月の太平洋赤道域の海面水温は、西部で顕著な正偏差、日付変更線の西側から東部にかけて顕著な負偏差だった ( 図 2、図 4 )。太平洋赤道域の海洋表層の水温は、西部で正偏差、中部から東部にかけて顕著な負偏差だった ( 図 3、図 5 )。太平洋赤道域の日付変更線付近の対流活動は平年より不活発で、西部から中部にかけて大気下層の東風偏差が卓越した ( 図 6、図 7、図 8 )。これらの状況はラニーニャ現象時の特徴を示している。

太平洋赤道域では、大気下層の東風偏差が続いたことにより中部から東部にかけての海洋表層の冷水偏差が維持されており、今後しばらくは海面水温の負偏差が続きやすいと考えられる ( 図 5 )。

エルニーニョ予測モデルは、エルニーニョ監視海域の海面水温が、今後冬にかけて基準値より低い値で推移すると予測している ( 図 9 )。

以上のことから、ラニーニャ現象が発生しているとみられ、冬までは持続する可能性が高い。

西太平洋熱帯域の海面水温は、秋から冬にかけて基準値に近いかまたは基準値より高い値で推移すると予測される ( 図 10 )。

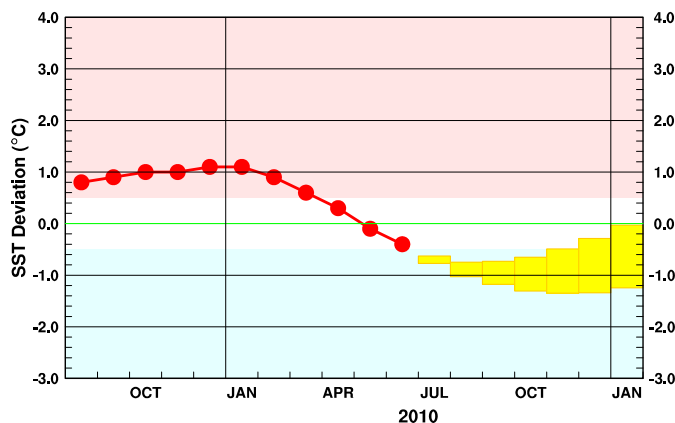
#### インド洋

インド洋熱帯域の海面水温は、夏には基準値より高い値から基準値に近い値に推移した ( 図 1 )。秋には基準値に近い値で推移し、その後次第に基準値より低くなると予測される ( 図 11 )。

#### 影響

8 月の日本の平均気温は、統計を開始した 1898 年以降の 113 年間で第 1 位の高い記録となった。この要因の一つである北半球中緯度対流圏の高温に、ラニーニャ現象が一部影響していたと考えられる。今後の日本の天候については、最新の季節予報を参照されたい。

8 月の世界の天候では、ロシア西部、モーリシャス付近の異常高温、およびロシア西部の異常少雨がラニーニャ現象時の特徴と一致していた。



この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の 5 か月移動平均値の 6 月までの推移 ( 折れ線グラフ ) とその後の予測 ( ボックス ) を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が 70% の確率で入る範囲を示す ( 基準値はその年の前年までの 30 年間の各月の平均値 )。

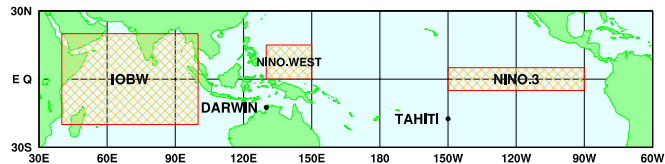
# 【監視・予測資料】

## 2010年8月における赤道域の海洋と大気の状態

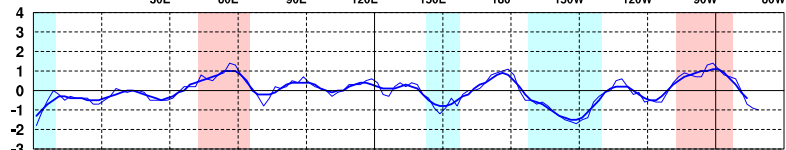
### 1. エルニーニョ監視指数(図1、表)

エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は  $-1.0^{\circ}\text{C}$

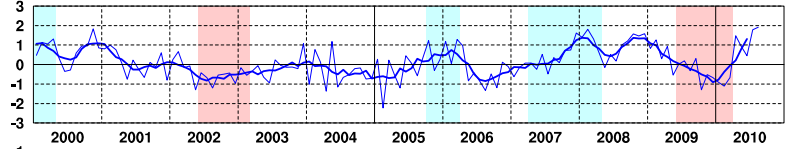
エルニーニョ現象等監視海域  
 NINO.3: エルニーニョ監視海域  
 NINO.WEST: 西太平洋熱帯域  
 IOBW: インド洋熱帯域



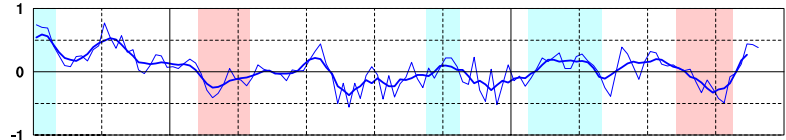
(a) エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値\*との差 ( $^{\circ}\text{C}$ )



(b) 南方振動指数\*\*



(c) 西太平洋熱帯域の海面水温の基準値\*との差 ( $^{\circ}\text{C}$ )



(d) インド洋熱帯域の海面水温の基準値\*との差 ( $^{\circ}\text{C}$ )

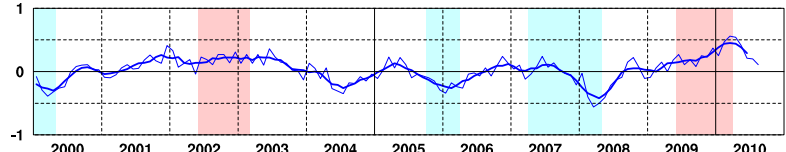


図1 各監視指数の最近10年間の経過

折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示す。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

\* 基準値：その年の前年までの30年間の各月の平均値((c)西太平洋熱帯域、(d)インド洋熱帯域では、30年間のトレンドも考慮している)

\*\* 南方振動指数はタヒチとダーウィン(TAHITIとDARWIN; 上図に位置を示した)の地上気圧の差を指数化したもので、貿易風の強さの目安の1つであり、正(負)の値は貿易風が強い(弱い)ことを表している。平年値は1971~2000年の30年平均値。

表 エルニーニョ監視海域の海面水温と南方振動指数の最近1年間の値

5か月移動平均値の 下線部 は  $+0.5^{\circ}\text{C}$  以上となった月を、斜字体は  $-0.5^{\circ}\text{C}$  以下となった月を示す。

海面水温と南方振動指数の最新月は速報値である。

	2009年				2010年							
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
月平均海面水温 ( $^{\circ}\text{C}$ )	25.7	25.7	26.3	26.6	26.7	27.2	27.8	28.1	27.1	25.8	24.8	24.1
基準値との差 ( $^{\circ}\text{C}$ )	+0.7	+0.7	+1.3	+1.4	+1.1	+0.8	+0.7	+0.6	0.0	-0.7	-0.9	-1.0
5か月移動平均 ( $^{\circ}\text{C}$ )	<u>+0.9</u>	<u>+1.0</u>	<u>+1.0</u>	<u>+1.1</u>	<u>+1.1</u>	<u>+0.9</u>	<u>+0.6</u>	+0.3	-0.1	-0.4		
南方振動指数	+0.3	-1.3	-0.5	-0.7	-0.9	-1.1	-0.7	+1.5	+0.9	+0.5	+1.8	+1.9

## 2. 海洋 ( 図 2 ~ 図 5 )

太平洋赤道域の海面水温は、西部で正偏差、日付変更線の西側から東部にかけて負偏差

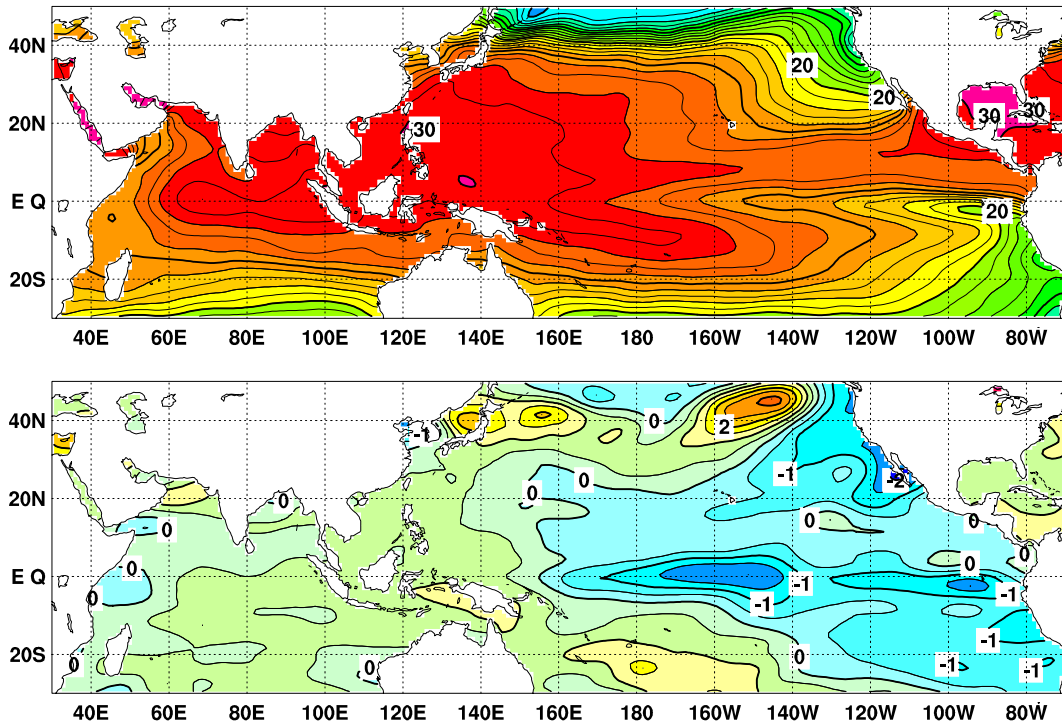


図 2 2010 年 8 月の海面水温図 ( 上 ) 及び 年 間 偏 差 図 ( 下 )

海面水温図の太線は 5°C 毎、細線は 1°C 毎の、年間偏差図の太線は 1°C 毎、細線は 0.5°C 毎の等値線を示す ( 年 間 偏 差 値 は 1971 ~ 2000 年 の 30 年 平 均 値 )

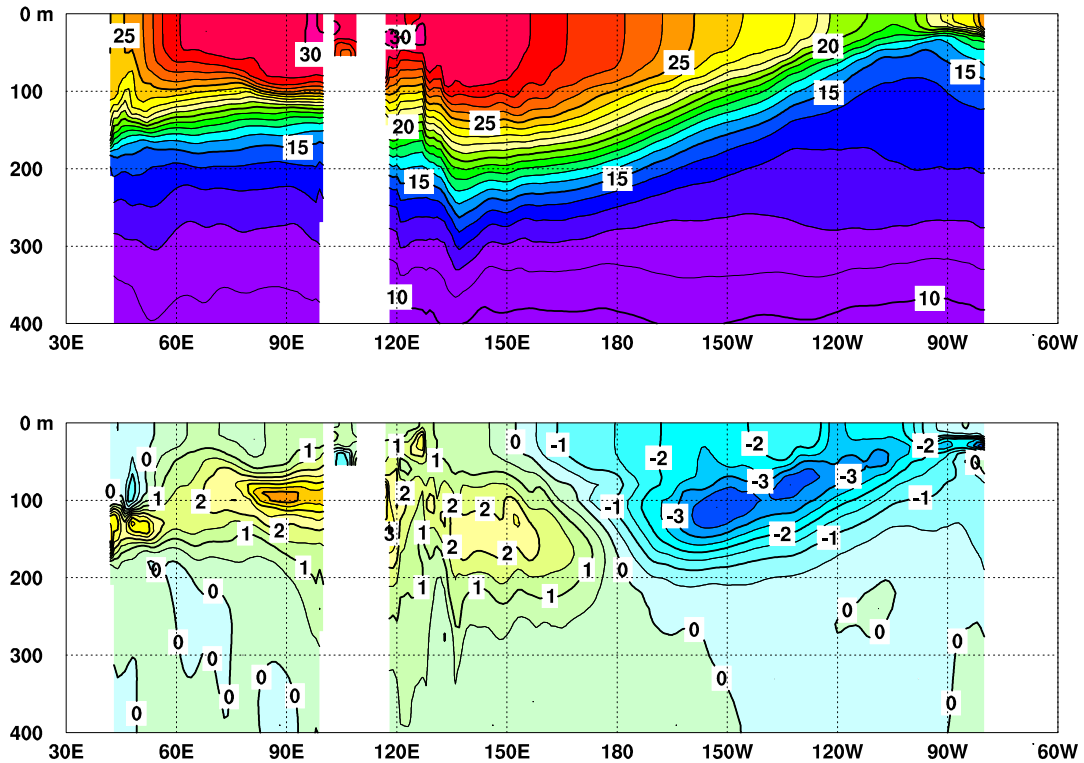


図 3 2010 年 8 月のインド洋から太平洋の赤道に沿った水温 ( 上 ) 及び 年 間 偏 差 ( 下 ) の 断 面 図

上 図 は 太 線 が 5°C 毎、細 線 が 1°C 毎 の 等 値 線 を 示 し、下 図 は 太 線 が 1°C、細 線 が 0.5°C 毎 の 等 値 線 を 示 す ( 年 間 偏 差 値 は 1979 ~ 2004 年 の 26 年 平 均 値 )。図 中 白 く 抜 け て い る 部 分 は 陸 地 で あ る。

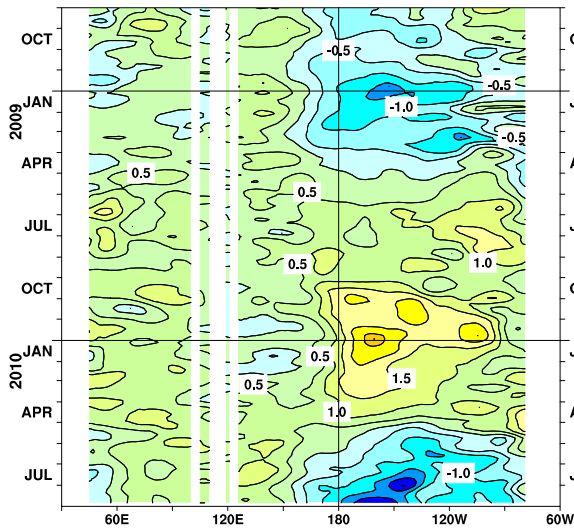


図4 インド洋から太平洋の赤道に沿った海面水温  
 年偏差の経度-時間断面図

太線は  $1^{\circ}\text{C}$  毎、細線は  $0.5^{\circ}\text{C}$  毎の等値線を示す（平  
 年値は 1971～2000 年の 30 年平均値）。図中白く抜け  
 ている部分は陸地である。

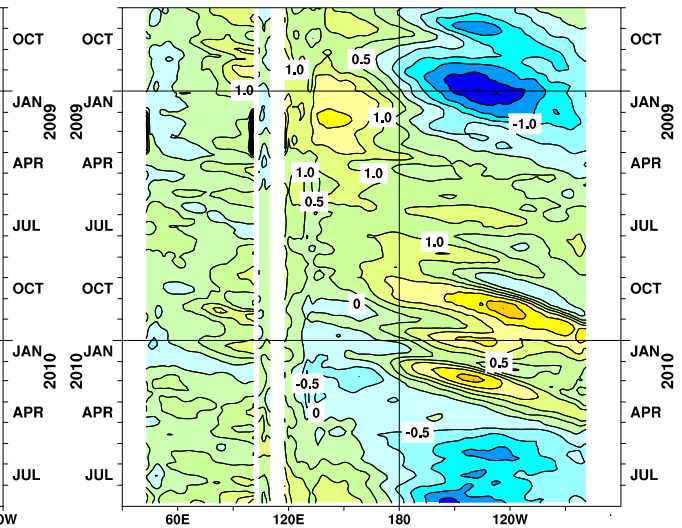


図5 インド洋から太平洋の赤道に沿った海面から深  
 度 300m までの平均水温年偏差の経度-時間断面図

太線は  $1^{\circ}\text{C}$  毎、細線は  $0.5^{\circ}\text{C}$  毎の等値線を示す（平  
 年値は 1979～2004 年の 26 年平均値）。図中白く抜け  
 ている部分は陸地である。

### 3. 大気 ( 図 6 ~ 図 8 )

太平洋赤道域の西部から中部にかけての大気下層で東風偏差が卓越

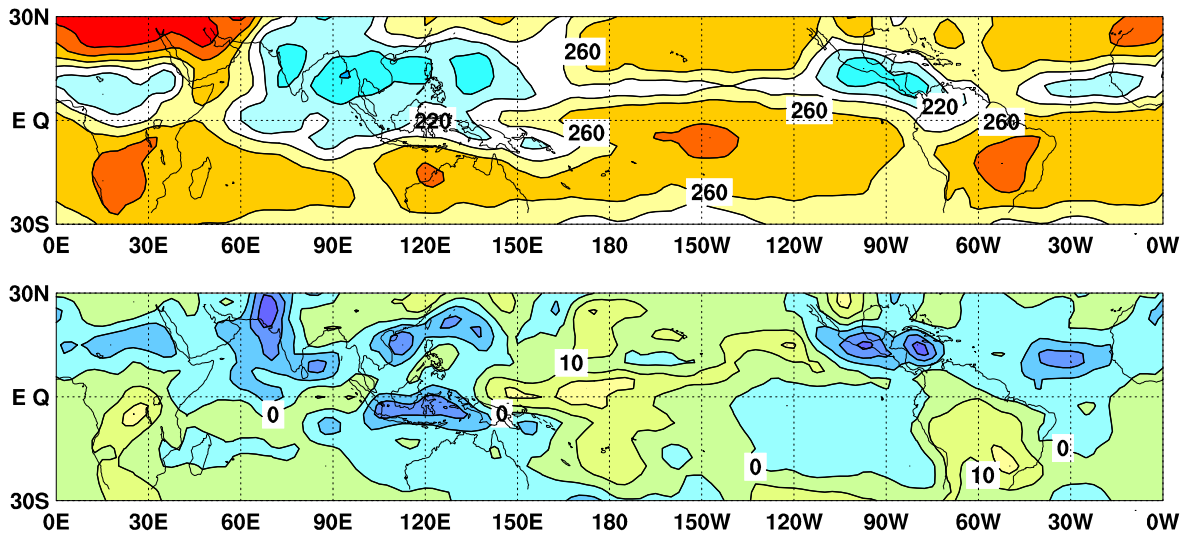


図 6 外向き長波放射量 (OLR) (上) 及び年偏差 (下) の分布図 (2010 年 8 月)

OLR の値が小さいほど、対流活動が活発であることを示しており、上図では  $220\text{W}/\text{m}^2$  以下の領域に青の陰影を施している。下図では OLR が年偏差より小さく、対流活動が活発な領域に青の陰影を、OLR が年偏差より大きく、対流活動が不活発な領域に緑～黄～赤の陰影を施している（年偏差は 1979～2004 年の 26 年平均値）。上図は  $20\text{W}/\text{m}^2$  毎、下図は  $10\text{W}/\text{m}^2$  毎に等値線を描いている。OLR データは米国海洋大気庁 (NOAA) から提供されたものである。

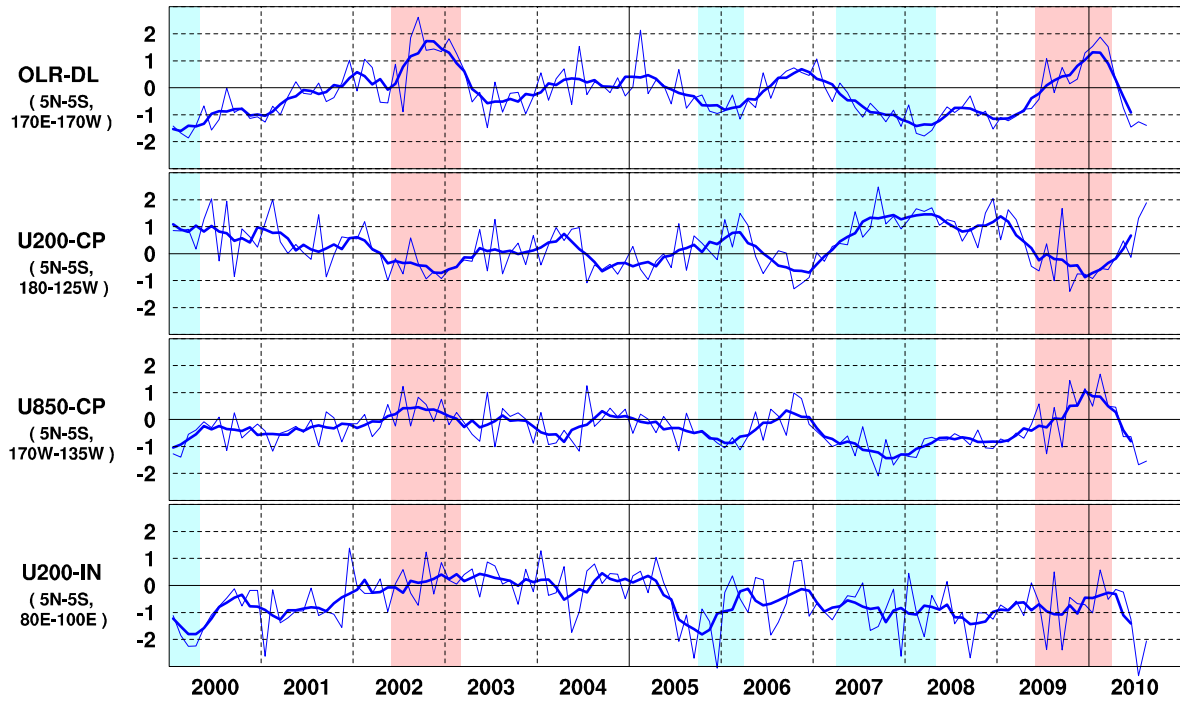


図 7 日付変更線付近の OLR 指数 (OLR-DL)、対流圏上層 (200hPa) の赤道東西風指数 (U200-CP)、対流圏下層 (850hPa) の赤道東西風指数 (U850-CP)、インド洋における対流圏上層 (200hPa) の赤道東西風指数 (U200-IN) の時系列 (上から順に)

折線は月平均値、滑らかな太線は 5 か月移動平均値を示す (平年値は 1979 ~ 2004 年の 26 年平均値)。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

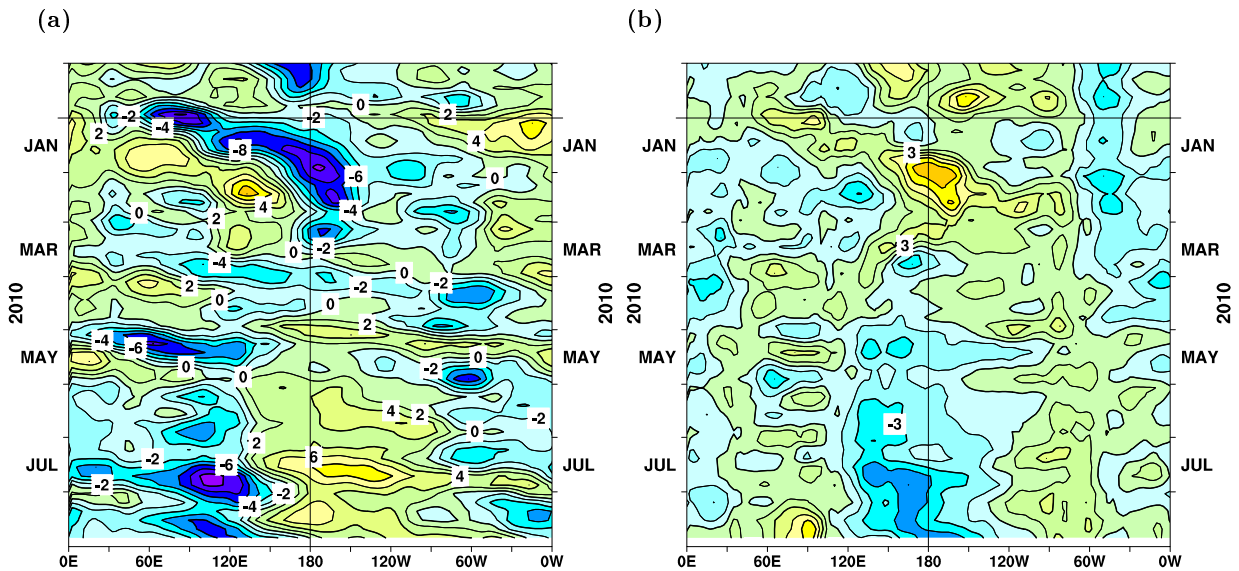


図 8 赤道付近における対流圏上層 (200hPa) の速度ポテンシャルの年偏差 (a) 及び対流圏下層 (850hPa) の東西風速の年偏差 (b) の経度-時間断面図

(a) 等値線の間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$  で、平年よりも発散が強く、対流活動が活発な領域に青の陰影を、平年よりも発散が弱く、対流活動が不活発な領域に緑~黄~赤の陰影を施している。(b) 等値線の間隔は  $1.5 \text{ m/s}$  で、西風偏差の領域には緑~黄~赤の陰影を、東風偏差の領域には青の陰影を施している (両者の平年値は 1979 ~ 2004 年の 26 年平均値)。

## 2010年9月～2011年3月の海面水温予測 (エルニーニョ予測モデルによる)

エルニーニョ監視海域の海面水温は、今後冬にかけて基準値より低い値で推移する

インド洋熱帯域の海面水温は、秋には基準値に近い値で推移し、その後次第に基準値より低くなる

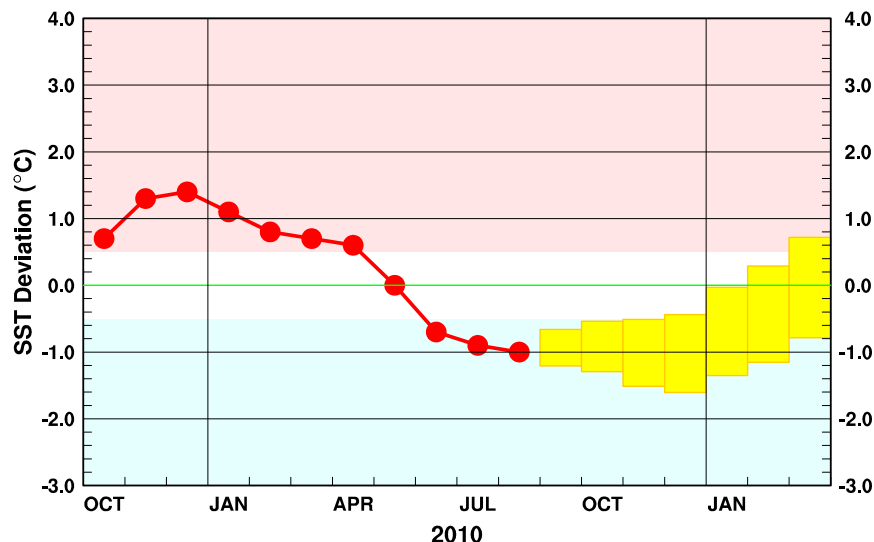


図9 エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）

各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

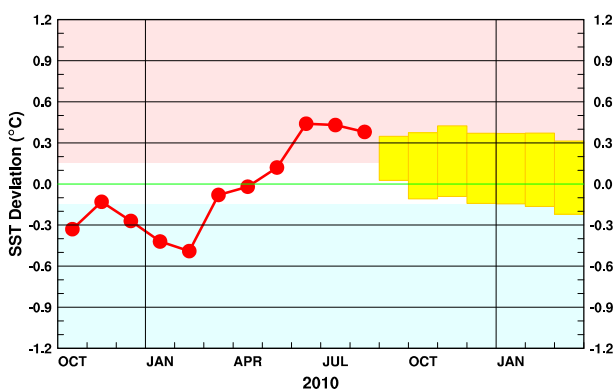


図10 西太平洋熱帯域の月平均海面水温の基準値との差の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）  
各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

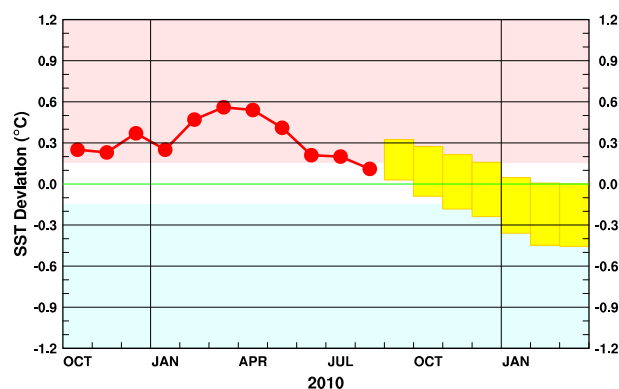


図11 インド洋熱帯域の月平均海面水温の基準値との差の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）  
各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

エルニーニョ現象などの情報は気象庁ホームページでもご覧いただけます。

(<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/elmino/index.html>)

来月の発表は、10月12日14時の予定です。  
内容に関する問い合わせ先：気候情報課  
(電話 03-3212-8341 内線 5134、5135)